

『古今著聞集』の編成と管絃説話

菅野 扶美

1 管絃歌舞篇の冒頭十一話

『古今著聞集』全二十卷三十篇の中で管絃歌舞篇の説話には、他篇と異なる特徴がある。年月日を明記して始める記録体の説話が多いことだ。記録体の説話自体はどの篇にもあるが、ここまで多いのは管絃歌舞篇のみである。その数全五十四話中約半分の二十六話、特に冒頭部十一話は記録体の連続であり、他の十五話は時代毎に幾つかのまとまりをもつて排列されている。本稿では冒頭部を主な対象とするので、次に説話番号と年月日と主題を簡単に挙げてみる。

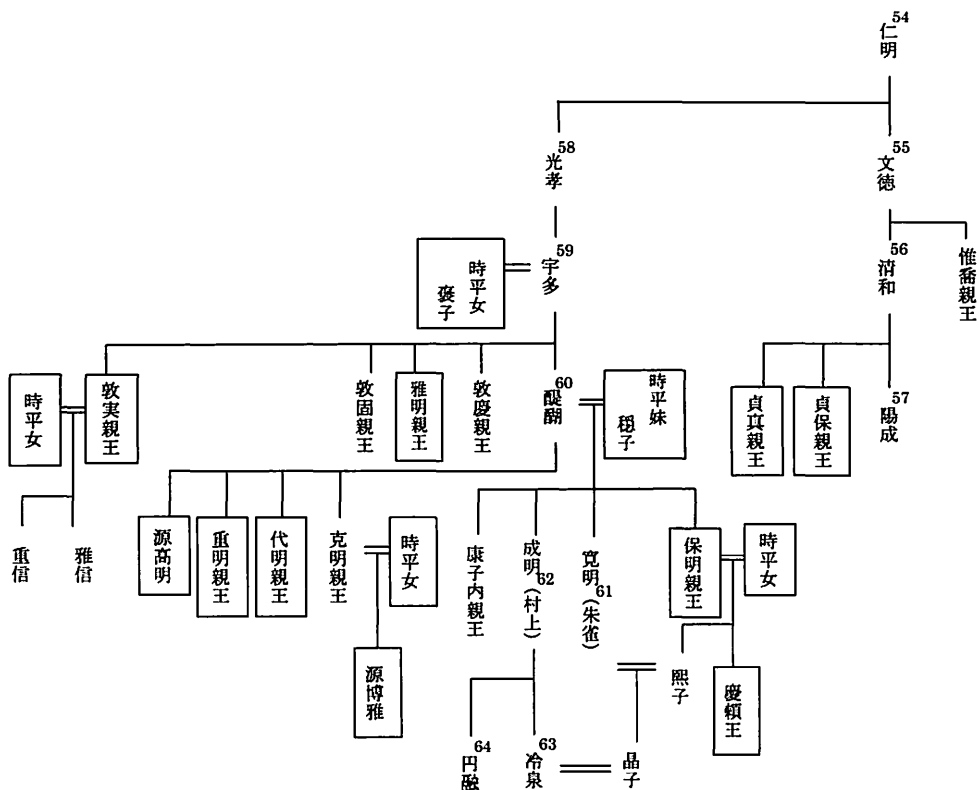
- 232 延喜四年十月 大井河行幸
- 233 延喜二十一年十月十八日 舞御覧
- 234 延長四年正月十八日 桜花宴
- 235 延長六年三月尽日 三月尽宴
- 236 延長七年三月二十六日 踏歌後宴
- 237 天慶八年正月五日 右大臣家大饗
- 238 天曆元年正月二十三日 内宴
- 239 天曆三年四月十二日 藤花宴
- 240 天曆五年正月二十三日 内宴

241 天曆七年十月十三日 庚申

242 康保三年十月七日 舞御覧

延喜・延長は醍醐帝、天慶は朱雀帝、天曆・康保は村上帝在位時の年号である。すなわち、冒頭部は聖代とされる醍醐・村上朝の音楽説話を時間順に排列していることになる。この後は、博雅三位など、主に人物に関わる音楽説話や秘曲説話が続くが、嘉保・長治・嘉承と堀河天皇在位時の年号の説話群、また終わりの部分は鳥羽院期の年号の説話になっている。楽に関わるこれら資料を編者橘成季は得ていたわけだ。そのうえで、このように本篇を構成した意図は何なのだろうか。

総じて各篇には小序（はしがき）が置かれる。博奕第十八や哀傷第二十一のようにいきなり説話に入るものを除き、漢文体あるいは和文体の短文が小序として添えられている中で、管絃歌舞第七は神祇第一、仏事第二と並ぶ長文の小序を有している。管絃のおこりとその役割を述べ「心を當時にやしなひ、名を後代に留る事、管絃にすぎたるはなし」と結ぶ。続く説話は、冒頭部ではこれのみ記録体ではない、231貞保親王の眼前に康承武の霊が顕現する話で、はじめ



にこの説話を配した意味も考えてみる必要がある（後述）。続く醍醐朝の五話を見ると、232雅明親王の見事な万歳楽の舞、233八条大將保忠が勅を受けて舞を奏する、234桜花宴での常陸親王等・保忠琵琶・主上和琴の演奏、235三月尽の宴にやはり保忠ら公卿と楽人による管絃の遊び、236踏歌後宴の負態の後の御遊に彈正親王・重明親王・保忠の弟敦忠。

更に村上朝の241までのほぼ各説話に親王・王子が登場している。231の貞保親王、232の雅明親王、234の常陸親王貞真、236の彈正宮代明・重明親王、237の式部卿親王敦実、238の重明親王、239の貞保親王と源高明、240の重明親王、241源高明という次第である。系図を見ればわかるように、これらの親王は主に醍醐の弟・息子であり、また清和天皇皇子貞保親王と貞真親王が現われている。清和は五十六代天皇、醍醐は六十代、なぜ醍醐朝に清和皇子が取りあげられるのか、いささか時代にあわない感じがするが、清和は九歳で即位、十八年在位したが、子の陽成も九歳で即位、在位八年、一七歳で退位した時、同母（藤原高子）弟貞保親王は十一歳であった。陽成の後天皇となったのは、清和の父・文徳の弟光孝で当時五十五歳。三年半在位して、次の宇多は十一年在位、そして醍醐となるが、その時十三歳。貞保親王は二十六歳である。年齢は離れているが同時代を生きた人と呼べるだろう。冒頭の十一話が記録体説話であることと、親王が必ずと言ってよいほど記録されているのは関係があるのだろうか。その中であって、親王の登場しない233・235はどのように考えるべきか。まずこの点から検討する。

2 八条大将保忠の管絃

233の全文は以下の通りである。

延喜二十一年十月八条大将保忠勅を受けて舞を奏する事

同二十一年十月十八日、八条大将保忠、中納言の時、勅をうけ給て、日比奏せざる舞を御覽せられけり。貞信公右大臣にてまゐり給。参音声には聖明楽をぞ奏しける。刑仙楽・西河・蘇志摩・傾坏楽・放鷹楽・弓士・採桑老・林歌・蘇莫者・汨洲・胡飲酒・輪台・甘醉、これらを御らむせられけり。この中雅楽属船木氏有は、放鷹楽を奏しけり。帽子に摺衣をぞきたりける。舞のあひだに、心にまかせて鳥をとらせければ、見る物目を驚かしけり。犬飼一人をぐしたりけり。これは、もとよりあるべき物にはあらざる事とかや。此舞承和に奏したりける。その、ちきこえず。この装束中納言ぞ調ぜられける。舞の後中納言庭におりて、氏有がとらす所の鳥をとりて、膳部にたまはせけり。其日の舞人、百雄・氏有・峰吉勸賞をかぶりけり。峰吉は箏築の上手にて賞をかうぶり、おとゝは和琴をぞしらべ給ける。

八条大将保忠は本院左大臣時平の一男、大納言正三位に至り、承平六（九三六）年七月十四日四十七歳で薨じている。本文に「中納言の時」とあるが、保忠はこの年延喜二十一年権中納言従三位である。父左大臣時平は延喜九（九〇九）年、三十九歳で世を去っている。その時保忠は十八歳、まだ従五位上であり、従四位上兼右大弁として公卿の一員となるのは、延喜十四年二十三歳の時だった。

さて当日は「日比奏せざる舞」ということで、刑仙楽から甘醉ま

で十三曲が披露された。確かに刑仙楽・西河・蘇志摩・弓士等は、鎌倉前期天福元（一二三三）年に編集された楽書「教訓抄」にはみられない曲で、承平年間に成立の「倭名類聚抄」で確認できるものであったりする。中でも放鷹楽は当日の見物であった。「帽子に摺衣」というなりは「古楽図」（通称「信西古楽図」）で見ることができ、これは「江家次第」の鷹狩り装束に「鷹飼 錦帽子、紫纈狩衣」等とあり、実際の鷹狩りの装束にできるだけ似せての演技であったようだ。この装束は「中納言ぞ調ぜられける」とあるから、保忠が整えた物で、この点を「ぞ」と強調しているのは、すでに雅楽寮ではこの特徴的な装束は用意できなかったことを示す。承平年中、すなわち仁明朝から絶えて舞われなかったという放鷹楽は、雅楽寮に伝承されていなかったのだろう。舞の最中に鷹狩りの態を清涼殿前で演じてみせたのも評判を取った。この場の様子は「西宮記」巻八「宴遊」にも「延喜二十年十月十八日」として「雅楽属船木氏有、着鷹飼装束、臂鶴独舞、^{放鷹}新羅琴師船良実、着犬飼装束不随犬、権中納言藤原朝臣、着小鳥於菊枝、立階前奏云、船木氏有進御賢、召膳部給」とあり、保忠は小鳥をくくりつけた菊の枝を持って、放鷹楽の舞に参加していたとわかる。

この「西宮記」には「頭書」として「御記云」の文を載せる。散逸した「醍醐天皇御記」の一部であろうが、その本文に本説話の表現と似通う部分がある。たとえば、説話本文に「舞のあひだに、心にまかせて鳥を取らせければ、見る物目を驚かしけり」とあるが、「御記云」では「舞間放任意令取小鳥見者属目（舞の間放ちて意に任せて小鳥を取らしむ 見る者目を属^{あつ}む）」とある。「犬飼一人をぐ

したりけり、これはもとよりあるべき物にはあらざる事とかや」も「有大飼一人此臨時所調非自本所可在」を訳したものとなる。『古今著聞集』が、たとえば「台記」のような記録本文を説話化しているのは指摘されていることである。³『醍醐天皇御記』もまた音楽説話の資料として、成季は利用していただろうとも指摘されている。⁴ここは、その追認になろうかと考えられる箇所である。清凉殿前の庭という限られた範囲において実際の鷹狩りを、専門家でもない雅楽寮の楽人にさせることは不可能だろう。『御記』『西宮記』で読む限り、保忠と楽人は放鷹を演じている。成季はそれを「心にかせて鳥をとらせければ」と、実際に放鷹したかのように記している。これが「説話化」という行為である。また、承和に奏して以来久々の舞であったこの度の放鷹は、以後、そういう風に伝承されてきた、という面もあるだろう。成季による資料の説話化という行為を改めて確認できる箇所である。

放鷹は「教訓抄」の段階で既に舞はすたれ、管絃だけの船樂となっていたようで、⁵『古今著聞集』の本話を「教訓抄」では「古記云」として掲げるも、「中納言藤原卿無実名」として保忠の存在は確認できていない。伯氏楽人の持っている伝書とは別な系統の資料を、成季は得ていたことがわかる。成季は楽人ではなくて学者であったということだろう。

説話に戻ると、²³³で保忠は醍醐天皇からの勅命で舞樂を奏する樂行事を拝命していることになろう。実際、『醍醐天皇御記』延喜十六（九一六）年三月五日御賀試樂には「樂行事参議保忠朝臣等。率樂人参着座」とあり、保忠は宇多法皇五十の賀の晴れの樂行事を

務めている。このことは後世、鳥羽院五十御賀の際に、『兵範記』仁平二（一一五二）年三月七日条で、樂行事について「延喜参議保忠卿、隆清卿、為行事之例也」と注している。保忠は管絃の名手だけでなく、場における管絃の流れ全てを監督できる力を持っていたのである。

保忠の管絃とは、たとえば「尊卑分脈」に「号八条／本朝鳳笙元祖也」とあり、「鳳笙師伝相承」にも「昭宣公―保忠―小治田行見―雅信・重信」。とあるように、まず笙で名高いが、「秦箏相承血脉」に「宇多院―時平―醍醐―伊勢―保忠」とあり、また実際に「御遊抄」「朝観行幸」延喜十八年二月二十六日行幸六条院に「笙。保忠朝臣。又時々弹琴」とあって、管だけではなく絃にも優れていたことがわかる。

さて、醍醐朝に「日比奏せざる舞」を、どうして保忠は復元できたのだろうか。それが基経―時平―保忠と続く当時の藤原北家の技能でもあったのだろう。前掲「鳳笙師伝相承」の祖昭宣公は保忠にとつて祖父の基経である。昭宣公の注に「延喜五年正月二十二日御記云、召保忠令吹笙、曲調頗無□聽乃賜橘皮笙、此笙者是故太政大臣昭宣公弱冠之時承和天皇為令習学所賜也、寛平年中以其名物而献上、其後為宜陽殿笙今尋旧意賜之」とある。延喜五年といえは保忠は十四歳。醍醐天皇の前で笙を吹いて御感に与り、祖父基経が弱冠の時仁明帝から賜り、今は宜陽殿の名物になっている橘皮という銘の笙を賜ったという。父時平も「秦箏相承血脉」にその名を載せ、宇多と醍醐の間にあって、箏のわざを伝えられ伝えている。時平こそは「醍醐天皇御記」中に頻繁に記される樂の名手、儀礼の主催者

であった。たとえば『御記』延喜二年三月二十日藤花の宴は時平の主催で献物に続き和歌・管絃歌舞を行う。同四年三月試楽には、時平は「舞庭中」、太鼓も打っている。時平の息保忠の弟敦忠も大変な名手・音楽家だったと『大鏡』は記し、昨今博雅三位を重く扱うが、敦忠が生きていれば、大したことはなかったのにと、古老たちは言いあつたという。しかし、博雅もまた醍醐皇子克明親王と時平五女との間の子であるし、時平四女は楽家藤氏の祖とされる敦実親王の室として、やはり音楽の名手雅信・重信兄弟の母である。つまり、この家自体が大変な楽の家であつたのだ。伝書・口伝の類は多く伝えられていたのだろう。雅楽寮の楽人だけでは舞えなかつた放鷹楽を、保忠は蘇らせたのである。

3 『古今著聞集』の天神説話と、冒頭五話の流れ

しかし、一般に保忠について伝わった印象といえば、父時平に左遷され、大宰府に果てて怨霊になった菅原道真・天神との関係においてだろう。『大鏡』では、時平一族の短命の話として、時平没後「この時平のおとどの御女もうせたまふ。御孫の春宮も、一男八条大将保忠卿もうせたまひにきかし」、更に保忠について「この殿ぞかし、病づきて、さまざま祈りしたまひ、薬師経読経、枕上にてせさせたまふに、「所謂宮毘羅大将」とうちあげたるを、「我を「くびる」とよむなりけり」と思しけり。臆病に、やがて絶え入りたまへば……」と、天神道真の怨霊におびえ、子も残さず死んでゆく人間として描く。この話は『太平記』巻十二「内裏造営」にも取り入れられ、この印象が長く続いている。

が、こと『古今著聞集』においては、天神道真の怨霊という面は、ことさら取りあげない。例えば神祇篇6では、北野社に宰相殿として祀られた宰相殿・菅原輔正に対して「天神よろこびて」と顕現する神としてあり、むしろ怪異篇・変化篇にもない。文学篇の110・120が、漢詩にめでて神意を表すなど「文道の大祖、風月の本主」としての面を示しているが、政道忠臣篇74「寛平法皇延喜聖主に御遺誠の事」に、

延喜の聖主、位につかせおはしまして後、本院右大臣・菅家・定国朝臣・季長朝臣・長谷雄朝臣、この五人その心をしれり、顧問にもそなはりぬべしとて、寛平法皇注申させたまひける。

としているのは、「本院右大臣（時平）」と「菅家（道真）」を併記して注目される。次の75も醍醐帝が遊覧にふけるのを「天神の臣下にておはしましける時、いさめたてまつられければ、とどまりにけり」とするのも同趣であろう。天神の説話としては、他に137・177・671があるが、これらは「十訓抄」からの増補で、歌徳説話の範疇に入るものだが、疑いを晴らす神としての面も表現されている。

既に「天神縁起」は十三世紀前半までに数種できており、「天神譚式」も作られるなど、天神信仰は新しい動きをみせている。『古今著聞集』の二年前に成立した「十訓抄」は、第六・十四で大宰府左遷の事・六・一七で飛梅の事・六・二三で怨霊となった道真の崇りの事・五・一七で醍醐帝と時平等を地獄で見る事と、「天神縁起」『大鏡』に則った説話を載せ、「時平はすべておごれる人にておはしけるにや」とする話も加える¹⁰。また「古事談」は「天神縁起」の類にはない説話を道真・時平・保忠それぞれ別に収録している。例

えば六―四八話は、相人が日本にとって時平は賢慮に過ぎ、道真は才能に過ぐ、「久しかるべきか」と、彼らの早世の遠因を占う話で、陥れ陥れられる関係を別の視点から扱っている¹⁾。これら、いわゆる説話らしい説話からすれば『古今著聞集』の天神の取り上げ方というのは独特なもので、人臣当時に戻して評価しようとする。醍醐帝を中心におけば、どうしても道真と並行しての時平とその一族は必要になり、そこに怨霊が入る必然性はない。怨霊としての天神を扱わない『古今著聞集』において、保忠も「大鏡」とは異なる面が強調される。それが管絃である。

保忠については、次の234・235にも笙に加えて、琵琶をはじめ絃索器を操る様子が記されるが、祝言篇の49にも登場する。

承平四年三月二十六日、天子常寧殿にて、皇太后「穩子」の五十の賀せさせ給けり。二十七日後宴に、式部卿親王以下まいり給。舞曲を御覧ぜられけるに、左大臣・右大臣・右大将保忠卿・大納言恒佐卿、庭において嵯峨をまひたまひけり。これ故実たる由、吏部王記し給て侍とかや。其後猶管絃の興ありけり。

承平四（九三四）年の「公卿補任」は上位から、摂政左大臣従一位忠平五十五歳、右大臣正三位仲平六十歳、大納言正三位保忠四十五歳、大納言正三位恒佐五十五歳となっており、この上位者四人が舞ったことになる。嵯峨八仙は「ころばせ」とも言い、「此舞ノ急ハ、小童部ノアソブトテ、足懸ト云事ノ鉢ニ侍也」（『教訓抄』）とあるから、重鎮が小童の鉢を装うのが笑いをも誘うのだろう。五十の御賀にもふさわしいとの「故実」があったとすると、縁辺の年た

けた上臈者の芸態であったと思える。穩子にとって忠平・仲平は兄弟、保忠は甥にあたり、醍醐朝を支えた藤原北家のある頂点を示す後宴の舞であった。おそらく保忠は本来そこにいたはずの時平の代わりとしての資格も備えて、その場に存在したのであるうし、諸説話の主要な人物たり得ている。

醍醐帝は時平妹穩子との間の保明親王をわずか二歳で皇太子とし、保明親王が元服すると、保忠の姉妹仁善子を入内させた。延喜十六年のことで、既に時平は亡くなっているが、醍醐と時平の関係は穩子や忠平らを媒介になお続いていたことになる。しかし次期天皇であったはずの保明親王が延喜二十三年二十一歳で亡くなると、醍醐帝は、ただちに道真の左遷詔書を取り消し、右大臣復位・正二位追号を行なう。そして延長へ改元し、保明親王と仁善子との間の慶頼王を立太子させ、その東宮大夫に指名されたのが保忠であった。保忠は従兄弟であった保明親王の遺児にして、甥である慶頼王を補佐し、父と醍醐帝とにあった関係を再現するはずだった。が、延長三年に五歳で慶頼王が亡くなり、その期待はむなしく終わった。233の放鷹楽を披露させた話に続いて234にも保忠が登場するが、これは延長四年正月（『古今著聞集』本文。『河海抄』所引「御記」では二月）十八日、内裏での桜花宴の事である。いわば233と234の間の五年間に保忠の運命は大きく振れたのである。

ここで管絃歌舞篇の第一話231は別にして、232から236の流れを見ると、232は延喜四年、大井河行幸の時、醍醐帝弟雅明親王が七歳で、船中万歳楽をみごとに舞った話。雅明親王母は時平の次女で保忠の姉妹になる。233は見てきた通り、舞楽復曲について保忠の行事ぶり

が中心の話になる。234は前述のように内裏での桜花の宴であるが、『醍醐天皇御記』によれば、文人たちによる詩の会が主であった。常陸親王貞真も詩の名手としてその場に臨んでいる。『源氏物語』「花の宴」でもそうだが、花の宴は詩歌会の機会でもある。しかし、本話では管絃歌舞篇であるためか、「文人詩を献じ伶人樂を奏しける」という修辭に留まり、常陸親王貞真の箏、保忠の琵琶、そして主上醍醐帝の和琴、「めでたかりける事なり」と括られる。235「延長六年三月尽宴の御遊」は、樂の在り方として、必ずしも二絃三管が揃わなくても御遊が成り立つという実例が語られるが、ここでの「左衛門督」は古典大系頭注にある通り伊望ではなくて保忠である¹²。また236には保忠と入れ替わるように、前述の『大鏡』において樂の名人とされ、その死を嘆かれた弟敦忠が登場する。親王の活躍が続くのは見てきた通りである。すなわち、これらは醍醐帝を中心とするその治世における管絃歌舞の機会を記したもので、朱雀帝も村上也醍醐・穩子間の皇子であり、その意味では前述の242までの記録体の説話は、広い意味での醍醐の皇子たちと保忠とを中心とする――保忠父時平はその皇子たちと殆ど縁戚関係にあった――管絃歌舞説話を集めて、篇の冒頭部に位置させたものの、とみなし得るのである。

4 記録体と非記録体の管絃説話

このような醍醐朝重視の在り様は、他篇ではどうか。管絃歌舞篇だけの特徴であるのだろうか。各篇記録体の説話の内、延喜・延長とその前後をみてゆくとどうなるだろうか。

例えば、巻頭神祇第一は、小序は天地始発から始まり、本篇第一

話にあたる2は内侍所の神鏡についてだが、3は「延長八年六月二十九日夜」貞崇が清涼殿で稻荷の託宣を受ける話。この貞崇について、釈教第二42に「吏部王記曰」として重明親王記を載せ、45に「承平元年の夏の比」としてやはり貞崇説話を載せるので、またまった貞崇説話が神祇篇と釈教篇に配分されていることになる。貞崇は醍醐朝の僧で、延長八年醍醐寺座主に補任されている。

政道忠臣第四は前にも触れたが、小序の次74に「延喜聖主、位につかせおはしまして後、本院右大臣・菅家……」とあり、75も醍醐帝と道真の話で始まる。一方で、文学第五は「天曆」と村上朝から始まる。和歌第六は全体量に対して記録体説話は少なく、「古今集」編纂などの説話も無く、醍醐朝に乏しい。このように記録体でないものも多いのであるが、年号に関わってみれば、

弓箭第十三343小序・344「延長五年四月十日」彈正親王が内裏で小弓の負態。

相撲強力第十五370小序・371「延長六年閏七月六日」童相撲。しかし中心は番果てての舞。左蘇合、右新鳥蘇。新作の胡蝶舞は「式部卿親王ぞ作たまひける」。式部卿親王・醍醐帝弟敦実に纏頭有。

博奕第十八417小序・419「延喜四年九月二十四日」清貫、寛蓮法師と囲碁。420「同御時、基勢法師、御前にて囲碁をつかうまつりて、銀の笙をうちたまはりてけり」。また421「承平七年正月十一日」右大臣仲平と中務卿宮具平親王と囲碁。

祝言第二十447小序・448「延長二年十二月二十二日」内裏で御賀を中宮穩子が奉る。「清涼殿にて遊宴ありけり。彈正親王（代

明」笛を吹、左大臣和琴を弾じ給けるに」。次の49が前述の穩子五十の御賀である。

哀傷第二十一 小序はなく、打ち付けに453「延長八年九月二十九日、延喜聖主崩御。…御硯、御書三卷、黒染宮一合、琴青眼、箏秋風、吏部王記ニハ風声ト注セラレタリ。和琴中宮弘徽殿、御賀ニ献セラレケル。御笛など入れられけり。内蔵助良峰義方和琴をしらぶ。樂所預丹後良名琴をしらぶ。皆平調にしらべける。和琴をば律調にぞしらべたりける。いまは土にこそ成侍ぬらめ。あはれなる事なり。」

怪異第二十六 小序・580「延長八年七月十五日酉時」流星。「同二十日」黒き雲より大蛇。

変化第二十七 小序・590「延長七年四月二十五日夜、宮中に鬼のあとありけり」・591「同八年六月二十五日」宇多院の御隨身、近衛右近陣にて変化をみる。592「同七月五日夜」下野長用が殷富門・武徳殿の間で変化と会う。593「承平元年六月二十八日未時」弘徽殿に鬼がでる。

草木第二十九 小序・647「延喜十三年十月十三日御記云」として菊花合。これは649「天曆七年十月十八日、殿上侍臣左右をわかつて、各殘菊をたてまつりけり。」中にも引かれている。記録体ではないものの、648「貞信公忠平衆を愛し式部卿親王家の衆木を自ら移植の事」は式部卿親王・重明親王とその邸宅の樹木の話である。

魚虫禽獸第三十 小序・675「延喜野行幸に御大御剣の石突を銜へ来る事」。記録体ではないが醍醐帝の野の行幸の際の説話。

以上を通読して二点気づく。延喜・延長・承平のほとんどが、小序の次か、その次に位置していること。つまり各篇において、最も古い時代の説話とみなされている点である。そして、その中の幾つかが管絃説話でもある点。弓箭篇の344は「小弓の負態」では管絃を行つたとの文言はないが、同じ小弓の会についての次の345では「簾中より管絃の御調度を出されたりければ、即糸竹・雜芸の興もありけり」とあり、或いは344でも同様の可能性はあつたかもしれない。草木篇の菊花合も同じである。

醍醐朝が各篇において始原・規範たる「古代」であつたのではないかという事について考える為に、延喜以前の時代を冒頭に置く篇をみると、神祇篇の神武天皇や釈教篇の欽明天皇・聖德太子、文学篇応神天皇等は別にして、和歌篇143嵯峨天皇、能書篇286嵯峨天皇・弘法大師、武勇篇334嵯峨天皇、画図篇384宇多天皇、博奕篇417天武天皇となつており、文雅の帝としての和歌・能書の嵯峨天皇（武勇篇は、嵯峨が田村丸を、小一条院が頼義を、白河院が忠盛を「身を放たで持たりける」話である）という主題はあるものの、延喜・延長の醍醐朝が圧倒的に古代性を象るものとして意識されていたことがわかる。

そのことは「延喜聖主」という呼称にも表れている。一般に、延喜・天曆は醍醐・村上の聖代とされるが、『古今著聞集』では、醍醐と村上は一線を画して扱われているようだ。105で「村上の聖主」とあるが、公事篇最終話のこれは、順徳院と廷臣が賭博のまねをして遊び、後鳥羽院に叱られる話で、その前置きに天曆五年内裏での番客（外来使節）の儀式のまねの「たはぶれ」のことを語る、その

中での謂である。兼明親王が使節役、「主上（朱雀）、村上上の聖主の親王にておはしましたるを」一緒になって戯れた、という話を合わせて、その場にいた成季の琵琶の師藤原孝時¹³から聞いたのだろうか、全体にくだけたおかしい話となっている。「村上上の聖主」と記しても、それは宮廷の伝承語りの呼称を伝えたままで、編者成季がとりたててそう称したともみえない。また管絃歌舞篇²³²に「天曆聖主」とあるが、まだ村上が生まれる前の話で、これは誤りで、話の内容からすると延喜聖主とあるのがふさわしいものである。村上は、「古今著聞集」ではおそらく「聖主」として存在してはいないのである。

管絃歌舞篇は第1項で述べたように、冒頭十一話は醍醐・朱雀・村上朝、非記録体説話十四の後、堀河朝と鳥羽院期の説話となり、最終話²⁸⁴は久安六（一一五〇）年近衛天皇時代で終わる。²⁸⁵は忠実と陀祇尼法の話だが、後半は寛喜元（一二二九）年の頃の法深房藤原孝時説話になる。他に²⁷³に建長五（一二五三）年、²⁷⁶に宝治三（一二四九）年の、それぞれ管絃説話が加えられて一話になっているが、話の主体はあくまで堀河院時代にある。

編者成季は管絃歌舞篇をみるかぎり、こうした記録体の説話になるような、典拠のある書物を専ら蒐集したかと思えるが、そうではない。成季が管絃歌舞篇以外に多くの管絃説話を他篇に配置していることは、既に詳しい指摘がある¹⁴。中でも注目すべきは宿執篇である。管絃説話の多さが管絃歌舞篇に継ぎ、全二〇話中十一話が管絃説話である。生死の境を越えて執着する念を、隨身は競馬の勝負に、頼通は平等院に、法華信者広清は法華誦經に、そして楽にふけ

る輩は楽に抱く。それは管絃歌舞への執心である。それら宿執篇の管絃説話の時期は、白河院政期から「古今著聞集」編纂当時の建長度までで、成季の琵琶の師孝時の話も多い。そしてここには記録体の管絃説話は一つもない。

ここで、編者成季の意図がはっきりするだろう。管絃歌舞篇の説話と宿執篇の管絃説話は、時代と内容が明確に使い分けられている。一方は聖代から続く儀式・儀式を成立させている管絃歌舞の存在、他方は人の心を引きつけてやまぬ管絃の力。成季にとってどちらも真実の管絃の姿であるが、混在させていけないのは、特に醍醐朝をもって「聖代」を示そうとしているからであろう。哀傷篇の冒頭話は前述の通り、醍醐帝の葬送の際、愛用の品々を棺に入れたが、記されたのは琴・箏・和琴・笛という楽器の数々であった。帝自身がいかに管絃に関わり深かったかを如実に知らせる事柄で、「いまは土にこそ成侍ぬらめ。あはれなる事なり」の「あはれ」は無論醍醐帝の死を悼むことばであるが、土になってしまったであろう名器を惜しむことばとも取れるだろう。

橘成季は、その跋文に、

この集のをこりは、予そのかみ、詩歌管絃のみち／＼に、時にとりてすぐれたるものがたりをあつめて、絵にかきとゞめむがためにと、いそのかみふるきむかしのあとより、あさちがすゑの世のなさにいたるまで、ひろく勘へあまなくしるす：

と書いているが、「詩歌管絃」の詩歌は別にして、管絃については確かに昔から今の世に至るまでの多くを集めている。管絃の機会は儀式儀礼に多いので、記録を集める。そして三十篇という編集を計

画した時、おのずと冒頭部に聖代を配し、すると内容は管絃の場に関わるものも多く重なつた、ということだろう。記録体でない管絃説話、醍醐朝より下がる時代の管絃説話も、各篇に利用した。例えば儉盜篇がよい例である。

儉盜篇の427小序に続き、第一話目の428「琵琶の名物元興寺の事」、429「盗人博雅三位の筆簾を聴きて改心の事」、430「筆簾師用光臨調子を吹き海賊感涙の事」、どれも管絃に関わる話で、しかも内容的には、429・430は音楽の徳の説話の範疇に入るものである。それを儉盜篇に入れている。全十九話のうち、盗人が改心したり盗んだ物を返したりする話(431・440・446)は他にもあり、また儉盜説話らしい大岡裁きのような例もある(434)中で、冒頭三話を名器―楽の名人―楽人の技という繋がりで並べたのは、管絃説話に対しての特別な扱いを思わせるし、このように記録体ではない管絃説話も成季は集めていた事を窺わせる。

実際他篇においても、例えば孝行恩愛篇の306「宇治内大臣頼長師徳を重んずる事」は、後白河の元服の際「御遊の笙の事、内大臣に仰られけるに、去四日東宮大夫師頼卿うせられしに、いく程もなくて、笙を吹ん事憚りありとて、手に所労の由を申されて、吹給はざりけり。漢書説は近代よみ伝たる人まれに侍に、彼の大夫大江家の説をつたへられたりければ、内府習給けり。師をおもんずる礼、いみじくぞ侍る」。これなども、本来は院政期の管絃説話であるものを、師恩説話と結びつけて、ここに位置させたとと思われる。こうした例はいくらかも挙げられる。頼長―師長―孝道―孝時という直接成季に繋がる琵琶西流を媒介とした説話の多くが必ずしも管絃に関わ

る話ではなくて、興言利口篇にヲコ話としても収められているが¹⁵、しかしこれも広い意味での管絃説話の系であろう。

5 親王たちのわざ―貞保親王と廉承武説話の意味

第2項でみたように、醍醐朝を中心に、この時代の文化にとって親王という存在の果たした役割は大きい、と成季は認識していたようだ。管絃歌舞篇については見てきた通りである。例えば、祝言篇は小序を除き、わずか五話であるが、448は延長二年の御賀、449は承平四年穩子五十の御賀、450は康和四年御賀の試楽、451は仁平二年鳥羽院五十の御賀、452は建長元年日吉禰宜成茂七十の賀で、管絃がないのは最後の説話だけで、あとは管絃歌舞説話といつてもいい¹⁶。その中で448は醍醐帝四十の御賀で、清涼殿での遊宴を中宮穩子が主催した時「彈正親王笛を吹、左大臣和琴を弾じ給けり。中宮御方より楽器をたてまつられける中に、北辺左大臣の清和御時、手自か、れたる春鶯囀の箏の譜を、木の枝に付てたてまつられける、めづらしくやさしき御をくり物なりかし」とある。彈正親王は醍醐天皇皇子代明、左大臣は穩子兄忠平、北辺左大臣は嵯峨天皇皇子源信。その人の手書きの箏譜という重宝が贈られた宴でも、楽の中心に親王・皇子の存在がある。

管絃だけではない。前引234の桜花の宴は詩会であり、常陸親王貞真親王がその主役であったことは「醍醐天皇御記」に詳しい。また、文学篇118は、大内記慶滋保胤が六条宮に問われて、大江匡房・紀育名・大江以言そして自分の詩文を評した話で、幸田露伴「連環記」の訳で名高いが、六条宮は村上天皇皇子後中書王の具平親王で

ある。醍醐天皇皇子兼明親王が前中書王であること、もちろんである。こうした親王の文化的活躍は十世紀までで、それ以降あまり見られないのは、ひとつは、寺に入って法親王となり、僧となる道が開かれたからであろう。まして院政期になると天皇自身が幼帝となり、皇太子もなくなるので、いきおい親王の場合は朝廷の外にならざるをえない。『古今著聞集』では法親王は、聖代から遠い院政期的存在であるからか、たとえば紫金台寺御室覺性は、好色篇323で稚児を寵愛し、変化篇596で、餓鬼に指を吸われる人として語られている。醍醐朝前後の親王のように面立たしい文化の担い手としては扱われていないのである。

醍醐帝には二十人近い妃、四十人弱の皇子女がいたとされる。その中で親王宣下を受ける者は、母系等から選ばれた少数の人に限られる、といっても、やはり醍醐帝親王の絶対数が多いのは事実である。しかし、天皇を含めた殿上人たちの音楽の遊び¹⁶「御遊」は、萩美津夫によれば、『西宮記』巻一「節会」に延喜八（九〇八）年「於本殿有御遊」とあるのが初見という¹⁷。近衛府や雅楽寮の、旧来の楽人による管絃歌舞にあきたらず、天皇を含む殿上人みずからが演奏を楽しむという御遊は、宇多・醍醐朝で官廷に定着する。同時に常設の楽所が置かれ、雅楽寮とは別に楽人が整えられてくるのも同時期である。延喜・延長の楽所は蔵人頭が代表であったようだが、延喜四年の蔵人頭は時平弟の仲平朝臣である¹⁸。このように御遊の始まりの時より、時平系は深く関わり、そして自在に楽器を操るわざを習得できる環境にあったのが親王たちや、第一級の貴族である藤原北家であった、ということだろう。いわば音楽が、選ばれ

た階級の上に許されたものであった時代であり、同時に、詩文と並んで楽が親王たちの競い合いの技として力を持っていた時代でもあったと思われる。

ここでようやく管絃歌舞篇の第一話231「貞保親王桂河の山庄にて放遊の時唐の廉承武が霊現はるる事」に及ぶ。なぜ一話目は記録体ではなく、なぜ貞保親王なのだろうか¹⁹。

日本に琵琶が将来されたのは、遣唐使藤原貞敏が帰国した時のことで、貞敏に琵琶を教え授けたのが、唐の楽博士廉承武であった。しかし、この話が琵琶の權威の象徴として、管絃説話の中で語られたのは、十三世紀以後とされる²⁰。最も早くは、成立順に「古事談」（二二二—二一五）で、「吉野吉水院楽書」は一二三九年以後、次いで「十訓抄」（二二五—二二）、「古今著聞集」（二二五—二四）であるが、それぞれに記される廉承武の話は同一ではない。まず、廉承武の霊が現れる場と人は、清涼殿にて村上天皇に上原石上曲を伝授、用いる琵琶は玄上、というのが「古事談」であり、「吉野吉水院楽書」は、相手が西宮左大臣高明となる。「十訓抄」は村上・高明二人が授けられたとの説を示す。また「平家物語」で、竹生島に詣でた経正の琵琶に、竹生島の弁才天が龍となって顕現する際、この説話も語られるが、村上帝に対して廉承武の霊が秘曲伝授をする、という話柄では「古事談」に準ずる。

ところで「古今著聞集」の廉承武説話はこれらと異なり、以下の通りである。

貞保親王、桂河の山庄にて放遊し給けるに、平調にしらべて五常楽をなす間、ともし火のうしろに、天冠の影、顕現しけり。

人々おち恐れければ、所現の影みづからはいはく、「我は唐家の廉承武の霊也。五常楽急百反におよぶ所には、かならず来侍るなり」とて失にけり。

桂河の山荘において、貞保親王のもとに現れた霊は、他の説話と違って、五常楽の急百反に及ぶところには必ず来る、という。すると貞保親王は五常楽急百反を奏したことになる。手にした楽器が琵琶かどうかとも記していないが、廉承武と貞保親王であれば琵琶だろうということだろうか。しかし、他の説話で重要な要素であった玄上の琵琶という限定はここにはない。秘曲伝授もない、村上天皇でもない、ということは、同じ廉承武説話といっても孤例になる。

『古今著聞集』262は同じ管絃歌舞篇であるが、季通が「非管絃者は口惜事」と言った例として、

堀河院御時、平調にて御遊ありしに、物の音よくしみて漸曉に及ぶに、「五常楽急百反に及べば、草木も舞なる物を。あるべし」とて、あそばされ侍りしに、五十反ばかりにて天明ければ、(以下略)

その時笙の名人豊原時元が、葦戸を押し開いて庭樹の動くのを見て「さて舞ふめるは」と言ったのに対し、非管絃者源顕雅が「あれは風の吹候へば、動くに侍り」と言ったので、皆失笑したという話である。逆に読めばこの時五常楽急百反はできず、五十反で夜が明けってしまったのだから、草木は舞いはしなかったのを、時元が風に揺れる木々を「舞ふ」と見立てて、その座の人々の称賛を買ったという話である。つまり、堀河院御時には奇跡は起こせなかった。しかし、231では、貞保親王は五常楽急百反によって、その証として廉承

武の霊を呼び寄せたことになる。

琵琶の始原の具体化としての廉承武説話はようやく定着しつつあった。しかしまだ話型は固定していない。貞保親王のこの説話は、おそらく『古今著聞集』の独自のものである。なぜなら、今まで見てきた通り『古今著聞集』には、醍醐朝を聖代とする意識が明確にあり、各篇の冒頭説話には醍醐朝をその時代とする話を置きたい、という意図があった。『古事談』のように村上帝や醍醐帝息源高明を主人公とするのでは足りない、時代も下り過ぎる。貞保親王は醍醐朝の、横笛・琵琶の第一人者であり、宇多法皇の命によって、横笛の笛譜をまとめ、敦実親王に琵琶の秘曲伝授も行っている。実際に琵琶をよくしたか記録のない村上帝ではなく、貞保親王でしかない佐藤辰雄も言っているが²¹、更に言えば「親王」であるからという大きな理由が、今まで述べ来たように『古今著聞集』内部にあるのである。廉承武の霊が出現する場が桂の山荘であるのも、清涼殿とする他説話と異なる点である。が、親王という立場にふさわしい設定であり、五常楽急を百反できる静かな場と時間があるのも、政治の中核にはいない親王らしい。村上、源高明等諸説ある中から、醍醐帝より年長で、同じ仁明系にある貞保親王を、『古今著聞集』は選んだのである。記録体説話でないのも始原を印象付ける。

醍醐朝の管絃の実際においても、その担い手に親王はかなりな部分を占めていた。管絃の機会を簡便に見られる『御遊抄』だが、改めて見ると、各儀式儀礼の書き始めは村上時代頃からが多い。醍醐朝の少ない例を見ると、たとえば「朝観行幸」延喜十七年三月十六

日は源融宅が宇多法皇御所になっているが、醍醐帝が琴、上野親王笛、帥親王琵琶、右大臣和琴。延喜十八年二月二十六日は六条院行幸、保忠笙時々彈琴、上野親王笛、前帥親王琵琶、中務親王箏、克明親王琴、和琴左大臣（右大臣の誤り）。「臨時御会」延長三年正月三日朝觀行幸。還御之後。於清涼殿。式部卿敦実親王。代明親王。右大臣。大納言藤原清貫左衛門督藤兼輔等奏絃哥。樂を担当するのはこのように親王が多い。そしてこれは村上朝までの現象であって、十世紀末頃には親王がこうした管絃の遊びに名を連ねることはなくなつてゆくのである。

十世紀の貴族文化の種々が親王によつて支えられていたことを『古今著聞集』はこのように示す。しかし『古今著聞集』より四十年近く前に編纂されている『古事談』において親王は必ずしもこのように描かれない。いわく醍醐帝第六皇子式明親王の二男親繁王は強盜である（四一一）。いわく皇太子保明親王を見た相人は「容貌国に過ぐ。この国に叶はず。久しかるべからずか」と占う（六一四十八）。いわく重明親王は「東三条は重明親王の旧宅なり。親王夢に日輪家の中に入ると見給ふ。然れども指せる事無くて畢んぬ」（六一二）。いかにもハ説話的興味から親王を觀察していて、これらの輪郭がくつきりと読み手に伝わる。『古今著聞集』ではひたすら樂の名手として語られる保忠も、桃尻だったため、大将として騎馬した際、落馬落冠、恥辱に及ぶと記される（二一七十九）。これら『古事談』の親王像を得ると、それに対していかに『古今著聞集』の親王像が、一つの役割としてしか書かれていないことが、よく見える。そしてそれは成季が依拠していたであろう資料——御記・

日記・御遊の記録等の態度そのものである。

成季は説話編者としての目を持っていなかったのではない。成季が説話として記録体の管絃の場と機会と人を列記して示したのは、あらまほしい時代としての醍醐朝とそれは管絃の記録が代弁するという確信である。ここに『古今著聞集』の、他にはない説話集の形が誕生したが、同時に、聖代の明確化は、それから下る時代のあからさまな種々相——例えば、後白河天皇と弟覚性法親王はともに好色篇で、それぞれの色恋が322・323と連続してあばかれる。院政期の王・親王のこうした姿を描くのに成季は何のためらいもない。聖代を冒頭に描かない篇が多くあることも前述した通りである。管絃説話こそが聖代を語るにふさわしい、としたところに、『古今著聞集』の独自性を見ることができるのである。

注

1 記録体に限らず管絃歌舞説話が集中に多い事は、磯水絵「『古今著聞集』管絃歌舞篇の性質——『教訓抄』と『文机談と』」（『説話と音楽伝承』和泉書院 二〇〇〇年。初出一九九六年）に詳しい。

2 『古今著聞集』本文は日本古典文学大系本によつたが旧字体は改めた。

3 前掲注1磯「『古今著聞集』の『台記』受容——卷第六、管絃歌舞篇第七を中心に——」（初出一九九六年）。

4 注3に同じ。

5 『宇治拾遺物語』『教訓抄』には、管絃としての放鷹樂も堀河朝

にはわからなくなり、ただ一人、興福寺の明暹（その師円慈と言う説話も）が伝えたという話が見える。なぜ南都の法師すきものに伝えられたかとされる点は興味深い。

6 「鳳笙師伝相承」本文は、上野学園日本音楽資料室研究年報「日本音楽史研究」第1号（一九九五年）翻刻の伏見宮本によった。

7 「秦箏相承血脈」は統群書類従本によった。

8 「大鏡」本文は、新編日本古典文学全集本によった。

9 菅野扶美「『北野天神縁起』と『天神講式』の作者——史料編纂所蔵『天神講式』奥書にみる曼殊院と天神信仰再編——」（山田昭全編『中世文学の展開と仏教』おうふう 二〇〇〇年）参照。

10 「十訓抄」本文は新編日本古典文学全集本によった。

11 「古事談」本文は新日本古典文学大系本によった。

12 「公卿補任」延長六年条に、左衛門督保忠、権中納言伊望とある。

13 孝時が成季の琵琶の師であったことは前掲注1に詳しい。

14 前掲注1参照。

15 535、542、559など。

16 本篇については、451を中心に櫻井利佳「御賀の童舞『胡飲酒』

——『古今著聞集』第四五一話——」（説話研究会『説話』11号

二〇一一年六月）参照。

17 荻美津夫「日本古代音楽史論」（吉川弘文館 一九七〇年）参照。

18 仲平が蔵人頭として楽所に関わっていたとは「西宮記」巻第八裏書および「公卿補任」延喜四年条からわかる。

19 貞保親王については、福島和夫「新撰横笛譜序文並びに貞保親王 私考」（『日本音楽史叢』和泉書院 二〇〇七年）参照。

20 佐藤辰雄「藤承武伝承の考察」（『日本文学誌要』第三十四号 一九八六年六月）。

21 前掲注20参照。

なお、本論で注したもの以外の資料は次の通りである。

教訓抄／日本思想大系 倭名類聚抄／「校本集成倭名類聚抄」（臨川書店 一九六八年） 江家次第・西宮記／尊経閣善本叢刊 古楽図／上野学園日本音楽研究所年報「日本音楽史研究」第6号 二〇〇〇年 醍醐天皇御記／所功編『三代御記逸文集成』（国書刊行会 一九八二年） 兵範記／増補史料大成 尊卑分脈・公卿補任／新訂増補国史大系 御遊抄／統群書類従

*

本稿は、中世歌謡研究会の輪講「古今著聞集」での発表に基づいている。席上、御教示を戴いた会員諸氏に御礼申し上げます。